

■教科書の変遷

●江戸時代～庭訓往来

☆寺子屋（庶民）



庭訓往来挿絵

●江戸時代～四書五経

- ・大学・論語・中庸
- ・孟子など

☆藩校（武士）



●明治7年

第3単語図（掛図）



●明治17年

小学読本 「初等科1学年後期から使用するもので、当時アメリカから移入された**ペスタロッチ主義**の開発主義教育方法を取り入れている。児童の直観や経験を重んじる、当時最も進歩的な教科書といわれている。」



●明治33年

坪内雄蔵(逍遥) 「国語読本」尋常小学校用

作家であった坪内雄蔵(逍遥)による「国語読本」は独創的な編輯と、物語教材も多く文学的性格とともに児童の心理と生活に合ったものとして、この期における民間発行の教科書として評価も高く、高等科用とともに多くの学校で使用された。



●昭和16年～（戦前）

「国民学校令」が公布される。これによって義務教育の年限が、8年間となるとともに、従来の国語、修身、地理、歴史が統合して国民科となり、国語は国民科国語と位置づけられた。初等科第1学年「ヨミカタ」が「アカイ アカイ アサヒ アサヒ」で始まることから、通称「アサヒ読本」と言われる。表紙、本文とも色刷りの国民学校時代の教科書である。



●昭和24年～（戦後）

昭和24年には、「まことさんはなこさん」、「いなかのいちにち」及び「いさむさんのうち」の3冊が発行された。これは、新しい教科書の検定制度の下、民間で出版される新しい国語教科書のモデルとして、GHQの提案により文部省が作成したものである。これらは、石森延男らが中心となって編集したものであり、国語入門教科書として、この後の検定教科書に与えた影響は大きい。

●平成19年～（ゆとり教育）

小学校1年生の国語の教科書

